

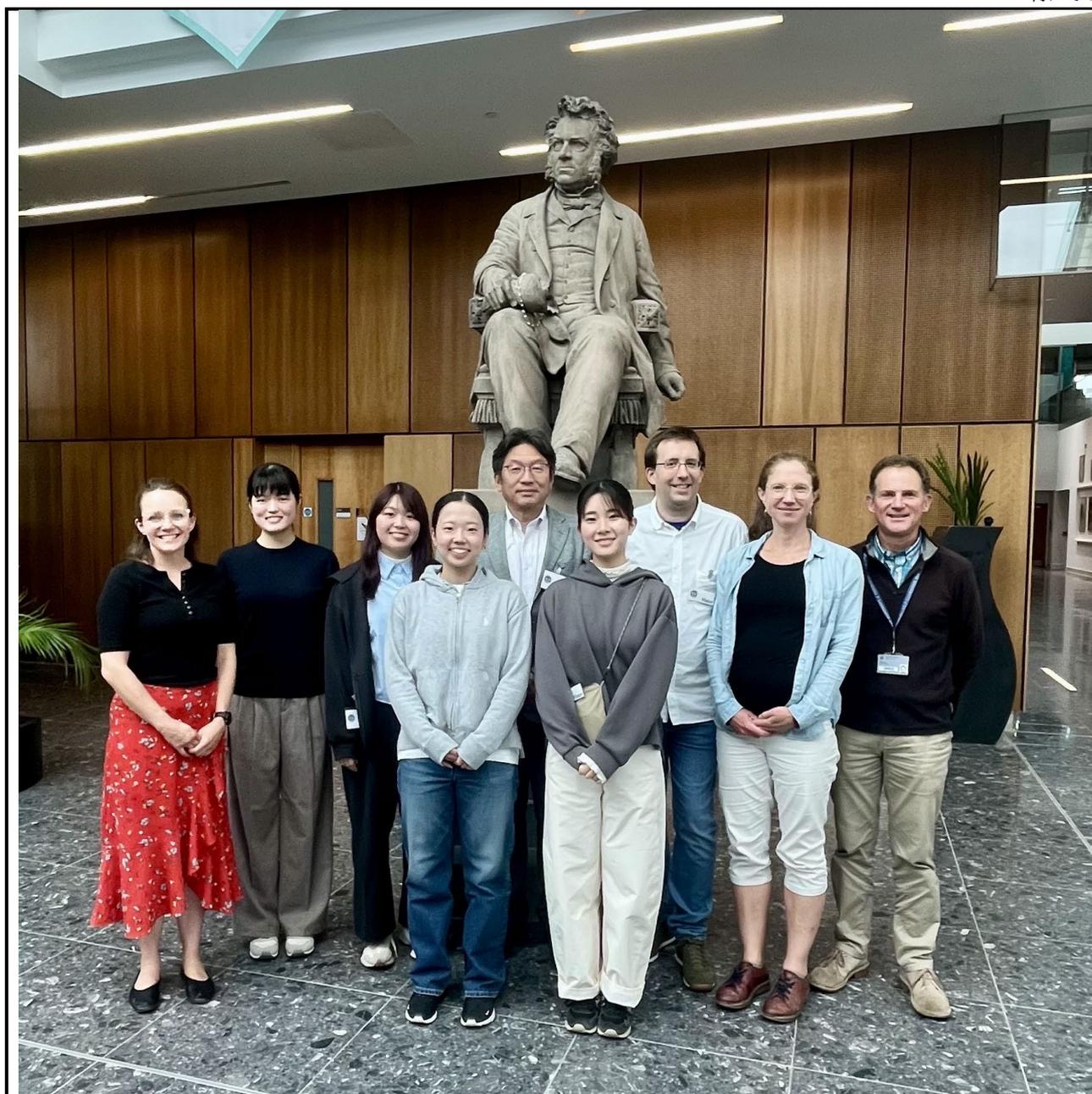
北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名/Name	加藤雅子		
所属教室/Laboratory		学年/Grade	4年
2. 申請区分/Application category			
<input checked="" type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	イギリス	都市名/City	エジンバラ
4. 派遣期間/Periods			
令和 7年 9月 13日 ~ 令和 7年 9月 25日 (13 日間) From (YYYY/MM/DD) to (YYYY/MM/DD) (XX days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p> <p>エジンバラ大学研修の 9 日間で最も印象に残っていることは、アニマルウェルフェアの充実である。私は、小動物のアニマルウェルフェア、特に犬の福祉について興味があり、本研修ではそれを実際の現場で知りたいと思い参加したため、主に小動物の福祉について学んだことを記載する。</p> <p>まず、小動物の動物福祉について、エジンバラ大学付属の動物病院で実施されている取り組みの説明を受けた。検査や治療について、動物の恐怖や不安、痛みを和らげるために鎮痛剤や抗不安薬を使用するのはもちろん、例えば注射をする際はもう一人のスタッフが動物の気を引いている間に素早く実施するなど、動物の気持ちを最優先に考えた処置が行われていた。動物病院見学の中で最も印象に残っているのは、来院した動物の表情である。動物病院に入っていく犬は尻尾を振っていたり、待合室ではリラックスして待機していたり、病院内では獣医に連れられて診察室まで自ら歩いて入っていたりした。獣医師の先生方も、病院での経験を動物にとって嫌なものではなく、できるだけいいものにしたいと話していた。そのために、前述のように処置から気をそらしたり、繊細な性格の患者は入院室を完全に隔離し、人の出入りを最小限にしたりと様々な工夫がされていた。そういった工夫のおかげか、病院へ行くのをためらっている犬はほとんど見られなかった。</p> <p>また、街中を散歩する中で衝撃を受けたのが、散歩している犬たちである。人が少ない道ではリードをつけずに散歩をしている犬が多く、指示がなくても飼い主のあとをついていっていた。さらにカフェやバスなどに飼い犬を連れて入ることができ、犬に対して寛容な雰囲気があった。そのような環境に感心したと同時に、犬に寛容な社会であるのは、飼い主全員が飼い犬について責任を持ち、しつけが行き届いているからだ実感した。</p> <p>エジンバラ研修を通して、飼い犬についての理解度と優先度が社会全体で高いことを実感した。飼い主は自分の犬に責任を持ち、人々はそれを知っているからこそ、公共の場や店内に犬がいても当たり前のように受け入れていた。動物病院では、正確な処置を最優先にしつつ、犬の気持ちにも配慮していた。これらは、すぐに実現できることではなく、動物病院や人々の地道な努力のうえで成り立っているものであると分かった。</p> <p>本研修を通して、動物福祉の意識が高いイギリスで、貴重な体験ができた。引率して下さった坪田先生、様々な準備をしてくださった IVEP 川島さん、現地で案内をしてくださった Nicola 先生、Holy 先生、研修中に様々なことを教えてくださったエジンバラ大学の先生方、一緒に研修に参加した北海道大学の学生に心から感謝申し上げる。</p>			



北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名/Name	門脇 日菜々 (カドワキ ヒナナ)		
所属教室/Laboratory	実験動物学教室	学年/Grade	4年
2. 申請区分/Application category			
<input checked="" type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	タイ	都市名/City	バンコク
4. 派遣期間/Periods			
令和 7年 8月 17日 ~ 令和 7年 9月 14日 (29日間) From (YYYY/MM/DD) to (YYYY/MM/DD) (XX days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p>			
<p>今回は、タイ王国にあるチュラロンコン大学 (CU) の動物病院にて、4週間の実習を受けた。本実習では4つの診療科を選び、それぞれの科で1週間ずつ、小動物臨床を中心とした研修を受けた。私は猫科、エキゾチック科、病理学ユニット、リハビリテーション・外科ユニットを訪れた。全ての派遣生が毎週異なる科を選択していたため、どの週も日本人は自分一人で、最初はかなり不安があった。しかし、先生方は熱心に理解できるまで説明してくださり、クリニカルローテーションで一緒になった学生たちもわかりやすい英語で教えてくれた。私は熱帯地域特有の症例を見たいと思っていたため、本報告書では印象的だった2つの症例について記す。</p> <p>1つ目は、1週目に訪れた猫科で見たスポロトリコーシスの症例である。これは土壌や植物に生息する真菌によって引き起こされる人獣共通感染症である。主に皮膚の傷から感染し、症状としては皮膚に結節が生じ、感染が拡大するとリンパ節が腫大することもある。日本ではほとんど見られないが、タイでは近年、スポロトリコーシスと診断される猫が増加している。しかし、この背景には、かつてはクリプトコッカスと勘違いされていた症例が正しくはスポロトリコーシスであったと判明したケースも多いと考えられており、本症例の数そのものが増えているわけではないと知った。この後の先生の説明で、タイでは真菌や寄生虫による感染症が多いことを知り、最初に日本との違いを実感した瞬間であった。CUの学生は本症例の原因や症状、治療法を詳しく知っており、よく見られる症例が異なれば、学ぶ内容も異なるのだと感じるとともに、日本以外で多く見られる病気についてももっと知っておくべきだと感じた。</p> <p>2つ目は、3週目に訪れた病理学ユニットで見た犬のピシウム症の症例である。これは <i>Pythium insidiosum</i> と呼ばれる卵菌によって引き起こされる人獣共通感染症である。熱帯や亜熱帯地域に特有で、日本ではヒトを含めて3件ほどしか確認されていない。難治性ではあるが、近年、抗菌剤が効くことが判明している。猫では口腔や肛門周囲、消化管、鼻腔など様々な部位に病変を形成するが、犬では消化管に腫瘤を形成する消化管ピシウム症が一般的である。本症例の犬も、腸管に多くの腫瘤が形成され、内部を物が通れない状態になっていた。また、剖検により胃に水が貯留していることが判明したため、犬が屋外の水を飲んだ際に菌も一緒に飲んでしまったと考えられる。この他にも、病理学ユニットでは、ほとんど毎日午前中に剖検を行った。犬や猫、ウサギだけでなく、ウミガメやリクガメの剖検も行うことができたのは非常によい経験になった。</p> <p>本実習では、上記の2つ以外にも非常に多くの症例を見ることができた。最後になりましたが、この1か月間が実習・日常生活ともに充実したものになったのは、北海道大学や CU の先生方、友人および北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会による学生海外派遣支援事業のご尽力があつてのことです。この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。</p>			



写真 1 : ピシウム症の犬の腸管



写真 2 : 猫科での集合写真



写真 3 : ウミガメの剖検

北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名/Name	ヒライシ マサヤ 平石 真也		
所属教室/Laboratory	解剖学教室	学年/Grade	大学院 4 年
2. 申請区分/Application category			
<input type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input checked="" type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	ニュージーランド	都市名/City	オークランド
4. 派遣期間/Periods			
令和 7 年 9 月 20 日 ~ 令和 7 年 10 月 6 日 (17 日間) From (YYYY/MM/DD) to (YYYY/MM/DD) (XX days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1 ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p> <p>獣医・医学分野において動物実験を行う際、各動物種の特徴を理解し最適な実験動物を選択することが重要である。一般にげっ歯類が用いられる一方で、本インターンシップの受入先であるオークランド大学医学部は様々な疾患の基礎・応用研究にヒツジやウシを活用している。今回、同大学の複数チームを数日単位で回り、大動物を用いた医学的研究に参加した。</p> <p>Dr. Haruna Suzuki-Kerr らは、難聴の病態解明と内耳への薬物投与方法の開発を行っている。同グループはヒツジの内耳がヒトと同等の大きさで構造を持つことに注目している。今回ヒツジを用いた聴力検査と薬剤の鼓室内投与、また耳部の解剖に参加した。これらを通じて、体表近くの外耳および中耳を非侵襲的に観察する方法、また頭蓋骨内の深部に位置する内耳を剖出する手技を習得した。</p> <p>Dr. Simerdeep Dhillon らは、早産児の脳発達障害を研究テーマとしている。今回、妊娠中ヒツジの臍帯を外科的に狭窄させ、胎子に虚血性脳障害を引き起こす手術を見学した。また、手術後のヒツジのモニタリング施設を見学し、ヒツジを実験利用する際の倫理的な配慮についても意見交換した。</p> <p>Dr. Paul Donaldson らの研究グループは、と畜場より入手可能なウシの眼球を使用し、水晶体と硝子体に着目して白内障の病態解明と治療法開発を目指している。今回、実験に参加する機会はなかったが、UV を用いた白内障の誘導など、同グループの研究内容について議論し、と畜場由来のウシ試料を利用する際の注意点（個体ごとの状態差など）も共有していただいた。</p> <p>また、同大学 Ngapouri 研究農場（オークランドから約 260 km）を訪問し、ヒツジ用手術施設のほか、低侵襲性の外科手術や栄養介入などを実施したヒツジを管理する放牧場を見学した。さらに同農場研究マネージャーの Dr. Mark Oliver らに私自身の研究内容を共有し、ヒツジ頭部の外科手術を含む将来の展望について、実現可能性や課題を議論した。</p>			
			
<p>① ヒツジへの薬剤鼓室内投与 ② 臍帯への狭窄器具の設置手術 ③ Ngapouri 研究農場</p>			
<p>以上、本インターンシップを通じて大動物を用いた獣医学・医学研究の利点や欠点、配慮すべき事項を学び、さらに現地の研究者との新たなネットワークを構築することができた。最後に、本インターンシップ実現のため貴重な助成をいただいた、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業に感謝申し上げます。</p>			

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名/Name	CHULUUN Mungunsar		
所属教室/Laboratory	Division of Infection and Immunity	学年/Grade	D3
2. 申請区分/Application category			
<input type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input checked="" type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	Zambia	都市名/City	Lusaka
4. 派遣期間/Periods			
令和 2025年 09月 06日 ~ 令和 2025年 09月 22日 (17日間) From (YYYY/MM/DD) to (YYYY/MM/DD) (XX days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1 ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することができる。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p>			
Date	Plan	Accommodation	
9/6(Sat.)-7(Sun.)	Chitose Airport→→→	Lusaka Airport	
9/8(Mon.)	Visiting JICA, Japanese Embassy	Troy Lodge	
9/9(Tue.)-9/13	SDA	UNZA	
9/14(Sun.)	Group activity	Lusaka National Park	
9/15(Mon.)	SDA	UNZA	
9/16(Tue.)	SDA	University Teaching Hospital	
9/17(Wed.)	SDA	Chibolya slaughterhouse	
9/18(Thu.)	SDA	Eden University	
9/19(Fri.)	SDA	UNZA	
9/20(Sat.)-21(Sun.)	Lusaka Airport→→→	Narita Airport	
9/22(Mon.)	Haneda Airport→→→	Chitose Airport	
<p>From September 6 to 22, 2025, I participated in the Student Overseas Activity Support Program in Lusaka, Zambia. The program provided valuable opportunities to observe international collaboration in veterinary medicine, public health, and community engagement. During the visit, I had meetings with JICA and the Japanese Embassy, where I learned about the role of international organizations in supporting local health and development. I also visited the University of Zambia (UNZA) and several institutions, including the University Teaching Hospital, Chibolya slaughterhouse, and Eden University. Through these visits, I was able to gain practical insight into the challenges of zoonotic disease control, slaughterhouse hygiene, and medical education in Zambia. In addition, group activities such as the visit to Lusaka National Park helped deepen cultural understanding and strengthen cooperation among participants. Overall, this program was a highly meaningful experience that enhanced my academic perspective and motivation for future research on global health issues. I would like to express my sincere gratitude to the Student Overseas Activity Support Program by the Academic Exchange Foundation, the Faculty/School of Veterinary Medicine, and the Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine for their generous support.</p>			

北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

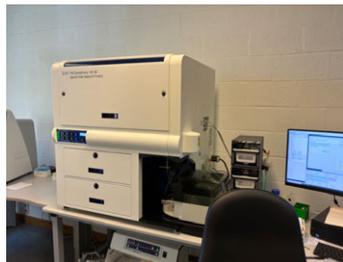
1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名/Name	ヨツヤ タケノリ 肆矢 岳紀		
所属教室/Laboratory	先端獣医療学教室	学年/Grade	学部 6 年
2. 申請区分/Application category			
<input checked="" type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	アメリカ合衆国 / カナダ	都市名/City	Salt Lake City / Guelph
4. 派遣期間/Periods			
令和 7 年 9 月 24 日 ~ 令和 7 年 10 月 12 日 (19 日間) From (YYYY/MM/DD) to (YYYY/MM/DD) (XX days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1 ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p> <p>本活動では、アメリカ獣医がん学会年次大会 (Veterinary Cancer Society annual conference)での口頭発表およびゲルフ大学 (カナダ) 附属動物病院腫瘍科の診療見学を行った。</p> <p>学会発表では、自身の課題研究のテーマであるイヌ多中心型リンパ腫に対する化学療法と強度変調放射線を用いた半身照射療法の併用プロトコルについての回顧的研究の成果を発表した。会場からも多くの質問をいただき、非常に貴重な経験になった。また、ほかの研究者の発表や講演を通して免疫療法や分子標的薬をはじめとする腫瘍研究の最前線を知ることができたことは大きな刺激になった。</p> <p>学会発表のあとカナダのゲルフ大学に移動し、2 週間腫瘍科の診療活動に参加した。主に腫瘍内科のレジデントと一緒に行動し、朝のラウンドから夕方のミーティングまで様々なことを経験した。基本的に紹介を受けて初めて受診する場合は、まずオンラインで疾患の背景知識や治療方針の相談を行っていた。特に印象的だったのはラウンドやセミナーの多さで、症例検討会、論文ゼミ、細胞診ラウンド、組織診断ラウンド、cancer biology ラウンドなどが毎日 1,2 回開催されており、専門分化が進んで専門外の分野の知識が手薄になる分、座学でカバーしようというシステムが出来上がっていた。また日本と比べると動物看護師の業務が多く、再診患者の受け入れから採血や抗がん剤投与まで多くの作業を動物看護師が行っており、分業が進んでいることを感じた。</p> <p>学会発表と診療見学を通して、自身の英語力の未熟さと必要性を痛感するとともに自分の将来像がより明確になり、大きなモチベーションとなった。</p> <p>末筆ながら、VCS での発表という目標をサポートしてくださった細谷先生をはじめとする先端獣医療学教室の皆様、診療見学をサポートしてくださったゲルフ大学・松山新先生に心より感謝申し上げます。また、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業からのご支援にも深く感謝申し上げます。</p>			
			
学会発表の様子			
			
学会会場			
			
Ontario Veterinary College Animal Cancer Centre			

北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名/Name	中村隼人		
所属教室/Laboratory	感染症学教室	学年/Grade	博士課程 3年
2. 申請区分/Application category			
<input type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input checked="" type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	ベルギー	都市名/City	リエージュ
4. 派遣期間/Periods			
令和 7年 9月 12日 ~ 令和 7年 9月 28日 (17日間) From (2025/09/12) to (2025/09/28) (17 days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1 ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p> <p>ベルギー・リエージュ大学 GIGA 研究所にて2週間のインターンシップに参加した。本研修の目的は、腫瘍や慢性感染症における T 細胞疲弊の背景となる抗原同定に不可欠なイムノペプチドミクス技術を習得することである。これまでに私は、BLV 感染牛で PD-1 および TIM-3 を高発現する T 細胞が典型的な疲弊化の特徴を示すことを報告してきた (Nakamura et al., 2025)。しかし、その疲弊を引き起こす抗原は未同定であり、本インターンシップはこの課題を解決するための重要なステップとなった。</p> <p>前半1週間は、イムノペプチドミクスの基礎講義や tims-TOF MS のデモンストレーションを受け、ヒト細胞株を用いた免疫沈降実習に取り組んだ。研究室で確立されたプロトコルに基づき、ポストドク研究者の指導のもと MHC クラス I 分子を免疫沈降し、ペプチドを抽出後、逆相カラムで MHC 分子とペプチドを分離した。後半はウェスタンブロットにより免疫沈降の成否を確認し、得られたサンプルを tims-TOF SCP に供するため Faculté des sciences に再訪し、解析用のデータ準備を行った。これにより、イムノペプチドミクスの基本原理から実験手法、質量分析に向けたサンプル調製までを体系的に学ぶことができた。実験に加えて、研究室所属の博士課程学生やポストドクと積極的に交流し、腫瘍免疫や感染免疫に関するディスカッションを行った。特に、腫瘍性疾患を研究するポストドク研究者との議論は、自身の研究の視点を広げる貴重な機会となった。さらに、最終日には隣接するリエージュ大学獣医学部を訪問し、先端的な動物医療施設や研究設備を見学したほか、研究者と牛や犬における多色フローサイトメトリー解析の可能性について意見交換を行った。</p> <p>これらの経験を通じて、ヒトと獣医領域双方の先端的研究環境を体験し、今後の研究に必要な技術的基盤を獲得するとともに、国際的な共同研究の展開に向けた視野を大きく広げることができた。最後に、本インターンシップの実施にあたりご支援いただいた北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金、北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業に深く感謝申し上げます。</p>			
   			
<p>現地の研究者との集合写真 質量分析装置 免疫沈降の様子 最新のフローサイトメトリー</p>			

北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名/Name	てらしま しずく 寺島 寧来		
所属教室/Laboratory	獣医外科学教室	学年/Grade	6年
2. 申請区分/Application category			
<input checked="" type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	アメリカ	都市名/City	コロラド州
4. 派遣期間/Periods			
令和7年10月4日 ~ 令和7年10月20日 (17日間) From (2025/10/04) to (2025/10/20) (17 days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p> <p>コロラド州立大学教育動物病院 (Veterinary Teaching Hospital) の小動物一般外科 (Small Animal General Surgery) にて、2週間の見学を行いました。小動物一般外科は、軟部組織外科の分野を専門としており、ここでは週3日の手術と2日の診療を見学しました。また1日の始まりと終わりには、「ラウンド」と呼ばれる先生からの質問形式の授業があり、コロラド州立大学の4年生とともに参加しました。</p> <p>まず驚いたのは、コロラド州立大学の学生の知識量の多さです。ラウンドでは、先生が様々な質問をしていきますが、その内容はとても細かく、広く、自分では習ったり勉強したりしたことのない内容も多くありました。しかし、そんな質問にも学生は積極的に回答していき、自分との知識量の差を見せつけられました。また、学生は研修医やレジデントの獣医師とペアを組み、各自が自分の症例を持って診療に参加していました。学生は1人で問診を取るだけでなく、治療計画について自分の意見を述べたり、診療記録を書いたりするなど、学生というよりも獣医師として診療に参加しているように感じられました。同じ最高学年の学生として、自分の知識量の少なさを認識させられた体験であり、もっと学ぼうと刺激を受けました。</p> <p>次に印象的だったのは、日本との来る症例の違いです。アメリカでは大型犬が多く、半分以上が大型犬であるように感じられました。それに伴い、喉頭麻痺やGDVが多く、それらに関する教育が重視されているように感じました。また、外傷の治療や帝王切開も多くありました。見学中に帝王切開を見学させてもらう機会があり、これまで見たことがなかったため、貴重な経験でした。飼育されている犬種や環境の違いにより、病院に来る症例の特徴が大きく変わることを体感しました。</p> <p>今回の見学の大きな目的は、アメリカの専門医制度やその教育制度について実際に見ること、および自分がレジデントを目指すために足りない部分を学ぶことでした。前者については、実際に行ったからこそその発見が多くありました。日本とアメリカで何が違うのか、アメリカでの専門医制度は何が特徴であるのかということをも自分なりに学べたと思います。ここで重要な発見は、アメリカの専門医制度がすべての点で日本より優っている訳ではないということでした。その上で、自分が目指す獣医になるためにはアメリカで学ぶことが本当に必要なのかということをしっかり考えるきっかけになりました。また後者については、自分の英語がどれだけ未熟であるのか、知識量が足りていないのかを実感し、これからの学習の意欲が高まりました。</p> <p>最後にはなりますが、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金および北海道大学獣医学部同窓会による学生海外派遣支援事業に深く感謝申し上げます。これからの獣医師としての目標や、獣医療への向き合い方を考える上で、とても重要な経験となりました。ありがとうございました。</p>			



Main Entrance of Veterinary Teaching Hospital at the Colorado State of University

北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

1. 申請者/Applicant.			
フリガナ 氏名 /Name	Maryam Sani Lawal		
所属教室/Laboratory	Collaboration and Education	学年/Grade	D4
2. 申請区分/Application category			
<input type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	The Netherlands	都市名/City	The Hague, Nijmegen
4. 派遣期間/Periods			
令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日 (日間) From (2025/10/11) to (2025/10/25) (15 days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1 ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p>			
<p>From 11–25 October 2025, I undertook a multi-institutional academic visit to the Netherlands that combined participation in a high-level international training programme with research exchanges at leading biotechnology and bioinformatics centres.</p> <p>1) T.M.C. Asser Institute – Training Programme on Disarmament & Non-Proliferation of WMD (The Hague). I participated in the OPCW-supported Training Programme on Disarmament and Non-Proliferation of Weapons of Mass Destruction. The course covered international law, verification mechanisms, dual-use governance, arms-control diplomacy, and responsible research practices. For my discipline, infectious disease genomics, this training strengthened my ability to situate genomic surveillance within broader frameworks of biosecurity, risk assessment, and global health governance, which are essential for One Health applications and pandemic preparedness. Through five days of field visits, lectures, group exercises, and casework, I explored how genomic evidence supports outbreak attribution, strengthens early-warning systems, and informs policy decisions.</p> <p>2) Research Visits – HAN BioCentre & Drug Discovery Lectorate, Radboud University, TropIQ Health Sciences (Nijmegen). Over several days, I conducted laboratory visits, facility tours, consultations, and collaborative meetings across multiple institutions in Nijmegen.</p> <ul style="list-style-type: none"> • HAN BioCentre & Drug Discovery Lectorate (in collaboration with Radboud University) <p>The visit focused on the application of advanced drug-design mechanisms in therapeutic discovery, as well as host–pathogen interactions and molecular diagnostics. We also explored collaboration on cost-effective microarray systems for pathogen detection with applications across human, animal, plant, and environmental domains. This visit provided insight into industry-level drug discovery, assay development, and biotechnology platforms, strengthening the bridge between academic genomics and translational research.</p> <ul style="list-style-type: none"> • TropIQ Health Sciences: I engaged with researchers working on high-throughput screening technologies, vector-borne disease modelling, and translational research aimed at infectious disease elimination. These works highlighted how computational and molecular tools can be integrated to support multi-pathogen surveillance in One Health systems. <p>Across all institutions, we identified concrete areas for collaboration and potential joint proposals. These interactions contribute directly to strengthening the One Health genomic surveillance component of my doctoral research and support my professional role in shaping the National Genomic Surveillance Strategy at the Nigeria Centre for Disease Control and Prevention (NCDC) and Beyond.</p> <p>Acknowledgment</p> <p>I express my sincere gratitude to the Student Overseas Activity Support Program, supported by the Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine, and the Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine, for enabling this overseas activity.</p>			



北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名 /Name	EDIDI ATANI FRANCOIS		
所属教室/Laboratory	Global Epidemiology	学年/Grade	D3
2. 申請区分/Application category			
<input type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	Philippines	都市名/City	Luzon
4. 派遣期間/Periods			
令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日 (日間) From (2025/11/8) to (2025/11/24) (17days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1 ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p>			
<p>The activity was based on molecular and serological surveillance of Reston virus in pigs and bats in Northern of Philippines.</p> <p>1. Samples</p> <p>The serum and nasal swab were collected from 60 pigs at 2 slaughterhouses (Mangaldan and Urdaneta) in the Pangasinan province where RESTV were isolated from pigs in 2008, 211 pigs at 1 slaughterhouse (San Miguel) in the Bulacan province. 12 sera from bat were also collected in Pangasinan province. The numbers of samples collected at each sampling site are summarized in table 1. These samples were collected by the laboratory technicians and stored at -80 C at Center for Transboundary Animal Diseases (CenTrAD) until use.</p> <p>2. Antibody detection</p> <p>271 pigs and 12 bats sera collected in Pangasinan and Bulacan provinces (northern of Philippines) were tested for detection of filovirus-specific IgG and IgM antibodies by enzyme-linked Immunosorbent assay (ELISA) using filovirus glycoprotein (GP) antigens. Using a Ni-NTA purification system, his-tagged soluble recombinant GPs of Ebola virus (EBOV), Reston virus (RESTV), Marburg virus (MARV), Lloviu virus (LLOV), Bombali virus (BOMV), Mengla virus (MLAV), and Dehong virus (DEHV) transfected with pCAGGS expressing each GP and used as antigens, followed by blocking with 3% skim milk. Serum samples diluted at 1:100 or 4-fold serially diluted from 1:100 were added and incubated overnight at 4 °C. The bound antibodies were visualized with horseradish peroxidase-labeled goat anti-pig (H+L) or anti-pig IgM antibodies and 3, 3', 5, 5'-tetramethylbenzidine (Sigma-Aldrich). For the statistical analysis of optical density (OD) values obtained by ELISA, the Smirnov-Grubbs rejection test was applied.</p> <p>3. RNA detection</p> <p>Nasal swab samples were tested for detection of the RESTV RNA genome by reverse-transcription polymerase chain reaction (RT-PCR). Briefly, total RNA was extracted from nasal swab samples with QIAamp Viral RNA Mini Kit (QIAGEN) according to the manufacturer's instructions. One-step RT-PCR was carried out using a QIAGEN OneStep RT-PCR kit (QIAGEN) with the filovirus-specific universal primers FiloNP-Fm, FiloNP-Rm, FiloNP-Fe, and FiloNP-Re were used. The RT-PCR were transported to Sapporo (Global</p>			

epidemiology/International Institute for Zoonosis Control) for further analysis. The RT-PCR products were subjected to 0.8% gel electrophoresis, and the target band of 594 base pairs was purified and the DNA collected was sequenced using specific primers targeting the conserved region of nucleoprotein of filoviruses.

This internship allowed me to acquire the skills in serology and molecular biology necessary for the diagnostic and surveillance of infectious diseases specifically filovirus. These skills could help him to implement the filovirus surveillance in animal samples in order to detect the filovirus reservoir in Africa, especially in the Democratic Republic of Congo, my home country.

I would like to sincerely thank the Student Overseas Activity Support Program for the financial support that enabled me to complete my two-week internship in the Philippines, where I acquired skills that will be very beneficial for my future career as a zoonosis control expert.

Host Institution: Center for transboundary Animal Diseases



Pictures taken during serology technique



Pictures taken during molecular biology techniques

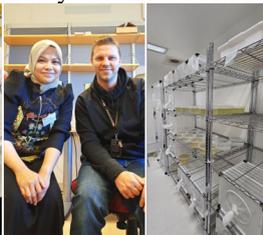


北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名/Name	DELA RIA NESTI		
所属教室/Laboratory	Collaboration and Education, IIZC	学年/Grade	IV
2. 申請区分/Application category			
<input type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	Sweden and Poland	都市名/City	Uppsala and Poznan
4. 派遣期間/Periods			
令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日 (日間) From (2025/09/14) to (2025/10/12) (30 days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1 ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p>			
<p>My overseas activities are integrated between the Student Free Design Activity (SFDA4) and the internship. The SFDA4 was conducted at the Zoonosis Science Center, Biomedicinskt Centrum (BMC), Uppsala University, Sweden, supervised by Dr. John Petterson. During the program, I attended intensive research meetings and visited their laboratories, including the mosquito lab, BSL-2, and BSL-3 laboratories. Research meetings were conducted by introducing my research activity, especially pathogen detection in wild animals. The discussion was intended for possible research collaboration in the future. For initiation, we decided to do a pilot project to investigate the virome in bushmeat in Indonesia. This research activity also collaborates with my research team in the One Health Collaborating Center, Gadjah Mada University, Indonesia. In addition, I was able to visit their collaborating institution, the Swedish University of Agricultural Sciences, to attend a lecture about food-borne disease and zoonotic parasites in Sweden. I also joined the public defense of a PhD student from BMC, whose research is in the investigation of microbial resistant genes in livestock and the environment. Furthermore, I was able to visit the Swedish Veterinary Agency (SVA) and join their activity in the parasitology laboratory. We investigated <i>Trichinella</i> from the muscle of hunted wild boar and brown bear. I also joined the analysis of <i>Giardia</i> in water samples and identified parasite eggs from tapeworm in horse samples. Subsequently, I did an internship at the Department of Genetics, Biology Collegium, Adam Mickiewicz University, Poland, supervised by Prof. Wojciech Makalowski. During the internship, I focused on developing my skills in bioinformatics and computational genomics. I attended a general meeting with the researcher for an introduction to department facilities and research. The training started with lecturing and discussion about Transposable elements (TEs) in humans and the pipeline to annotate the TEs location in the human genome. I did exercise to create a command-line script to extract the genome sequence from a specific coordinate according to the location of each TEs. I investigated the miscoordination location in the current data and provided the correct location. This training has improved my skills in bioinformatics, especially in designing and modifying new command scripts to analyze genomic data in the future. Overall, this overseas activity gave me a valuable experience to improve my knowledge and skills as well as develop collaboration for my future career and my institution in Indonesia. I would like to acknowledge the contribution of the Student Overseas Activity Support Program by the Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine, and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine in facilitating the success of this event.</p>			
			
Visited on BMC and SVA, Sweden		Internship on Adam Mickiewicz University, Poland	

北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Progra

1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名/Name	Richard Musonda		
所属教室/Laboratory	Division of Bioinformatics	学年/Grade	4
2. 申請区分/Application category			
<input type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input checked="" type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	Zambia	都市名/City	Lusaka
4. 派遣期間/Periods			
令和 2025 年 12 月 03 日 ~ 令和 2025 年 12 月 27 日 (24 日間) From (YYYY/MM/DD) to (YYYY/MM/DD) (XX days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1 ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p>			
<p>Objective and Institutional Placement: The primary objective of this internship was to engage to gain practical experience in public health data management within a Zambian context. I was primarily stationed within the Department of Strategic Planning and Information Management, while also collaborating closely with the Antimicrobial Resistance (AMR) Unit and the National Reference Laboratory.</p> <p>Technical Activities and One Health Collaboration: From December 4th to December 12th, I worked under the supervision of Dr. Joseph Chizimu within the AMR Unit. During this period, I participated in a week-long field mission to Kabwe District as part of a joint One Health team. This multidisciplinary team, comprising both human and veterinary health experts, was tasked with drafting the 2025 One Health Antimicrobial Resistance National Report for the Ministry of Health.</p> <p>My specific role involved providing technical and bioinformatic support to the human health team. I utilized R software to process and summarize complex raw surveillance data into structured tables and high-resolution graphical visualizations. A key output of this work was the generation of a comprehensive antibiogram for Gram-negative bacteria isolated from various Zambian hospitals, which provided critical insights into local resistance patterns.</p> <p>Research Integration and Future Outlook: Beyond data analysis, this period allowed me to observe the operations of the National Reference Laboratory, providing valuable context for how data is generated and utilized for national policy. The experience of managing real-world Zambian health data has been instrumental in refining my doctoral. This dispatch has laid a strong foundation for future collaborative research between Hokkaido University and ZNPHI.</p> <p>Acknowledgements: I would like to express my sincere gratitude for the support provided by the "Student Overseas Activity Support Program" by the Academic Exchange Foundation,</p>			

Faculty/School of Veterinary Medicine, and the Alumni Association of Hokkaido University
School of Veterinary Medicine.



北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名/Name	ヒロイユウタ 廣井裕太		
所属教室/Laboratory	毒性学教室	学年/Grade	5年
2. 申請区分/Application category			
<input checked="" type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	オーストラリア	都市名/City	シドニー
4. 派遣期間/Periods			
令和 8年 2月 21日 ~ 令和 8年 2月 27日 (7日間) From (2026/2/21) to (2026/2/27) (7-days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1 ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p> <p>シドニーに到着した日曜日は野生動物保護施設を見学しました。施設ではオーストラリア固有種が何種類も飼育されており、その特徴をガイドの方に教えていただきました。月曜日の午前中はシドニー大学獣医学部学部長の先生より、学部のカリキュラムや特色について説明を頂きました。午後は野生動物病院の説明ののちに現地の3年生と共に授業を受けました。学生が授業を受ける様子は日本とあまり変わらないように思われました。火曜日、水曜日は一日中野生動物病院の診療に参加しました。コアラの眼科検査、カンガルーの後肢外傷、衰弱したオオコウモリ、便秘のウォンバットの子供など日本では絶対に見ることのできない症例の数々を見ることができました。また、水曜日の診療後には現地でウォンバットの子供のケアをされているボランティアの方のご自宅を訪問させて頂きました。そこでは彼女がどうしてケアを始められたのか、そのケアにはどのような意味があるのかについてお話を伺いました。最終日の木曜日にはシドニー市街にある水族館と動物園への往診に参加しました。また、現地の学生とも盛んに交流することができました。シドニー大学には日本からの留学生も多く、彼らを中心に集まった現地学生と親しくなることができました。お互いの大学のカリキュラムや国における獣医師の立ち位置、卒後進路など大変有意義な交流をすることができました。</p>			
			
病院内での実習の様子			
<p>本研修の実施にあたり、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業より多大なるご支援を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。</p>			

北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名/Name	ヒラヤマ カオル 平山 薫		
所属教室/Laboratory	野生動物学教室（仮配属）	学年/Grade	4年
2. 申請区分/Application category			
<input checked="" type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	オーストラリア	都市名/City	シドニー
4. 派遣期間/Periods			
令和 8年 2月 21日 ~ 令和 8年 2月 27日 (7日間) From (YYYY/MM/DD) to (YYYY/MM/DD) (XX days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1 ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。 - Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p> <p>私は、オーストラリアの固有種の保全活動や、野生動物専門の病院での獣医師の業務、固有種の形態学的特徴を学ぶことを目標にシドニー大学へ留学しました。日本には少ない野生動物の臨床の現場で、日本との保全へのアプローチの違いや野生動物の種差を学ぶことができました。</p> <p>日本と比べて、オーストラリアでは野生動物を保護することが当たり前となっていると感じました。1日目には、保護施設でオーストラリアの固有種を観察しました。ガイドをしてくださった方は、別の仕事をしながら休みの日に施設でボランティアをしているそうです。野生動物が好きで、4年間も続けているとのことでした。施設はボランティアで運営されており、野生動物専門の職にたかなくても野生動物の保護に関わることができることが私にとっては新たな視点でした。</p> <p>また、オーストラリアでは、ボランティアで野生動物を家で一時的に保護し世話をするケアラーの方が多くいます。そのうち一人の家を訪問させていただき、世話をしているウォンバットの赤ちゃんを見せていただきました。数時間ごとにミルクを与えるため、まとまった睡眠が取れないにもかかわらず、その方は幸せそうで、動物への愛とエネルギーにあふれていました。日本ではあまり聞かない活動で、とても印象的でした。</p> <p>シドニー大学の野生動物専門の病院では、基本的には野生からの保護個体のみを受け入れ、動物園などの展示動物はみないとのことでした。日本では、負傷した野生個体を病院に連れていくことが一般的ではありません。また、シドニー大学では、診療を行い、野生復帰は難しいと判断された個体については基本的に安楽死となり、展示動物となる例はほとんどないそうです。これも日本と異なる点だと思いました。日本では、保護個体のうち、野生復帰が難しい個体は動物園で展示されることもあります。オーストラリアでは、怪我をしたり孤児となったりした個体を保護し、回復後や成長後に野生に戻すという流れが確立されており、地域の人々にもその認識が広がっていました。</p> <p>北海道で運転中に、車にひかれたと思われる野生動物を見つけることがあります。その際に助けを求める連絡先が明確であればと考えたことがありました。しかし、シドニー大学の病院でも外来種は安楽殺をするように、どの動物種を助けるか人間が決めるということは、難しい問題だと考えました。外来種ではないけれど個体数が増えているエゾシカを保護するのかなど、もし日本で野生動物専門の病院を始めた場合に考えることは多いと思いました。そのようなことを、留学中に受けた講義でも考えさせられました。どこまで保護するかは人によって意見が異なり、人為的な被害によるものは介入して保護するべきという考えもあると先生はおっしゃっていました。その中で、どの種でも、苦痛から解放するために最低限、適切に安楽死させる制度は重要と考えました。</p> <p>診療の実習を通して、オーストラリアの固有種の形態学的な特徴や、多くみられる疾患についても学ぶことができました。ウォンバットが捕食者から身を守るための臀部のプレートを持つことや、疥癬にかかることなど、種の特徴をこれまで知らなかったことに気づき、臨床の現場では種ごとに</p>			

勉強する必要があることを実感しました。私は野生動物の形態学を研究対象とするため、種差に着目して研究を進めたいと思いました。最終日には、シドニーの動物園と水族館を見学し、病院で見られなかった動物種も観察することができました。獣医学の基礎知識に加えて、これからは世界中の野生動物の種差について勉強していきたいです。

北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会の皆さまに心よりお礼申し上げます。学生海外派遣支援事業にて助成金をいただき、誠にありがとうございました。



図1. 野生動物保護施設の
タスマニアデビルのエリア



図2. 診療をはじめから見学させて
いただいたウォンバットの仔



図3. カンガルーの育児嚢の内部

学生海外派遣支援事業報告書

Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine

Report of Student Overseas Activity Support Program

1. 申請者/Applicant			
フリガナ 氏名/Name	ジンノウチ トシキ 陣内 俊輝 / Toshiki JINNOUCHI		
所属教室/Laboratory		学年/Grade	学部 4 年
2. 申請区分/Application category			
<input checked="" type="checkbox"/>	学部学生海外派遣助成/ Overseas Travel Expense Support for Undergraduate Student		
<input type="checkbox"/>	大学院生海外旅行保険助成/ Overseas Travel Insurance Support for Graduate Student		
3. 海外派遣先/Destination			
国名/Country	オーストラリア/Australia	都市名/City	シドニー/Sydney
4. 派遣期間/Periods			
令和 8 年 2 月 21 日 ~ 令和 8 年 2 月 27 日 (7 日間) From (2026/02/21) to (2026/02/27) (7 days)			
5. 派遣先での活動/Activities			
<p>- 1 ページ以内で記載する。活動を示す写真を付すことを推奨する。末尾に、北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部学術交流基金・北海道大学獣医学部同窓会 学生海外派遣支援事業 への謝辞を述べる。報告書は website で公表することがある。</p> <p>- Describe within 1 page. Photos showing activities should be attached. Please acknowledge to the support of "Student Overseas Activity Support Program" by Academic Exchange Foundation, Faculty/School of Veterinary Medicine and Alumni Association of Hokkaido University School of Veterinary Medicine at the end. The report will be opened at the website.</p> <p>本派遣プログラムにおける活動内容は、大きくシドニー大学野生動物病院での臨床実習と野生動物保全に関する施設の見学の二つに分けられる。</p> <p>野生動物病院では、主に外傷を負った野生動物が保護活動を行っている人（ケアラー）によって運び込まれてくる。そのうちおよそ半数は安楽死処置を施すことになり、それらの理由はすでに治療が困難な致命的な傷を負っていることや、処置によって救命をすることはできるが機能の回復が難しく動物が自然な行動を表現することが困難になることや野生に還すことができないことなどが挙げられる。</p> <p>野生動物病院における臨床の目的はその動物を野生に還すことであり、動物の予後やその動物をケアラーのもとで管理を続けるかなどは野生に還すことができる見込みがあるかを焦点として判断する。私も診療に参加させていただいた中で致命的な外傷を負ったトカゲやカワセミなどを適切な鎮静、麻酔処置を施したのちに安楽殺するところに立ち会った。この処置はシドニー大学の学生が獣医師の先生の指導のもと行っていた。</p> <p>また、母親が事故で死亡してしまった孤児の動物も多く運び込まれ、成長して野生に還すまでの入院管理を行っていた。その多くは有袋類の子供（joey）であり、本来ならば母親の育児嚢の中にいる月齢であり母乳により育っている。その母乳の組成は子供の発育期に応じて変化し、必要な栄養素の変化に合わせて乳も変わるそうだ。そのため、入院管理している子供達には発育段階に応じた乳や対応する給餌をする必要がある。給餌の作り方までは実習では行わなかったが、給餌に立ちあわせていただいた。</p> <p>以上のように病院の臨床実習では入院管理と運び込まれてきた野生動物（主に外傷）の検査、処置を学ばせていただいた。野生動物保全区では多くの爬虫類やケアが必要な有袋類などが飼育されていた。これらはボランティアのスタッフによって運営されているようで保護による終生飼育もあれば、野生復帰を目指す個体もいるようだった。オーストラリア特有の多くの種やそのほか日本では見ることが難しい爬虫類や、一方で日本でもペットとして人気なトカゲなどさまざまな動物を紹介していただき、実際に触れたりなどもさせていただいた。</p> <p>最後に、本実習に参加するにあたりご支援を賜りました北海道大学大学院獣医学研究院、北海道大学獣医学部学術交流基金、ならびに北海道大学獣医学部同窓会学生海外派遣支援事業に対し、心より感謝申し上げます。これらのご支援により、本実習を通して海外の獣医学教育や臨床の現場を実際に経験するという大変貴重な機会を得ることができました。本実習で得られた経験と知見を今後の学習および将来の獣医師としての活動に生かしていきたいと考えております。ここに深く御礼申し上げます。</p>			
			